

一 単元名 開けよう狂言の扉 開こう「柿山伏」の音読発表会

二 学習材名 伝えられてきたもの／狂言 柿山伏／柿山伏について（光村図書 六年）

三 単元について

(1) 第五学年及び第六学年の国語科の「C 読むこと」の指導目標は「目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」ことである。この目標に迫るためには、多様な文章に対応し、その文章全体から内容や要旨をとらえるための様々な読み方を身に付けたり、目的に応じて計画的に読書をしたりする力が必要である。

また、伝統的な言語文化に関する事項では、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」と「古典について解説した文章を読み、昔の人のもの見方や感じ方を知ること」を、三領域の指導を通して培っていく必要がある。特に「C 読むこと」を通して指導する際には、音読によって言葉のリズムを実感したり、内容の大体をとらえたりできるようにすることが重要である。

これまで子どもたちは、音読について、「せんねん まんねん」において、反復表現の面白さを味わいながら繰り返し音読したり、「カレーライス」において、人物の心情の移り変わりをとらえるために文章全体を通して音読したりする学習を行ってきた。また、伝統的な言語文化については、「春暁」などの音読を通して、文語調の表現に徐々に慣れ、リズムのよさを感じたり、場所や時代が違っても感じ方には似ている点があることに気付いたりすることができた。

これらの学習を通して、子どもたちは声に出して読むことを楽しみながら、内容の理解を深めることができている。今後は、文語調の文章に更に親しむとともに、文章を読んで一人一人が自分なりに解釈したことを、書き手の意図と合わせて相手に伝えるという表現性を高めた音読や朗読の力を身に付けていく必要がある。

(2) 本単元では、「狂言 柿山伏」を音読することを通して、狂言独特の表現や調子の面白さを味わったり、自分の思いを表現したりし、「伝えられてきたこと」「柿山伏について」を通して、昔の人のもの見方や感じ方を知ることがをねらいとしている。

「狂言 柿山伏」は、狂言についての短い説明と「柿山伏」の台本から成っており、「伝えられてきたもの」は伝統的な言語文化、特に古文の変遷について、「柿山伏について」は狂言や「柿山伏」の魅力について、それぞれ解説した文章である。

設定した言語活動は、五年生を対象として「柿山伏」の音読発表会を開くことである。狂言は、室町時代から庶民に親しまれた伝統芸能であり、表現することで受け継がれてきている。子どもたちも、鑑賞するだけでなく表現することを通して狂言に親しむことで、分かりやすく狂言の面白さにふれることができる。また、五年生は、古典の文章を学習し始める学年であり、六年生にとつて伝統文化を伝えたい相手となると考える。つまり、出合った「柿山伏」という狂言を、台本や解説した文章から内容の理解を図り、その魅力を五年生に伝える活動を通して、古典に親しみ、表現性を高めた音読の力を身に付けることができる。

したがって、子どもの実態と身に付けたい力から判断して、本単元は適材と言える。

(3) 指導にあたっては、次の点に留意していく。

一点目は、身に付けた言語能力の活用を図る言語活動の設定についてである。子どもたちが目標に向かって主体的に学習を進めることができるように、中学年までに培ってきた内容理解のための正確に音読する力を活用する音読発表会を設定する。また、単位時間内でも、個人または全体で発見した狂言独特の言い回しの読み方や表現性を高めた音読の仕方を活用できるようにする。

二点目は、読みの交流の場についてである。本単元の学習では、文章に対する一人一人の読みが音読に直結する。そのため、個々の解釈が大変重要になるが、互いの読みを交流することで動きや声の出し方の変化といった表現性の向上につなげたい。つまり、今もっている自分の考えを基によりよい表現を模索する中で読みの深まりも見られると考える。そのために、様々な形態を用いて読みの交流を行っていく。

三点目は、読みの深まりに気付く振り返りについてである。子ども自身が身に付いた力を実感するために、目標や活動後の姿を自覚することが大切である。そのため、単元や単位時間の導入場面で、丁寧に課題意識を醸成したり、目指す姿を明確にしたりする。また、学んだ内容や方法について互いの振り返りを認め合い、成長を喜び合う態度を大切にしたい。

四 指導目標

(1) 関心・意欲・態度
 ・ 狂言を含めた伝統文化について理解し、自分の思いや考えが相手に伝わるように音読しようとする。

(2) 読むこと
 ・ 自分の思いや考えが伝わるように音読をすることができる。 (C)ア

(3) 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (ア)ア
 ・ 狂言の台本が書かれた文章について、内容の大体を知り、音読することができる。 (ア)イ
 ・ 古文の変遷や狂言について解説した文章を読んで、昔の人のものの見方や感じ方を知ることができる。 (ア)イ

五 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度

・ 文章に対する自分なりの考えをもち、よりよい表現をしようとしている。

イ 読む能力
 ・ 自分が解釈したことをどのように読めば聞き手にもよく味わってもらえるかを考えながら音読をしている。

ウ 言語についての知識・理解・技能
 ・ 親しみやすい文語調の文章について、内容の大体を知り、音読をしている。
 ・ 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を、現代人のものの見方や感じ方と比べている。

六 指導計画と評価計画

次時	学習活動	評価規準と評価方法 (一)	未達成の場合の手立て
I 1	<ul style="list-style-type: none"> 「狂言 柿山伏」を鑑賞し、感想を述べ合う。 学習課題を設定し、学習計画を立てる。 	ア 狂言について、内容を理解しようとして聞いている。【聞き方やその後の話し合いの様子】	<ul style="list-style-type: none"> 感想を記入する際、気付いたことを箇条書きで書くようにする。
開けよう狂言の扉 開こう「柿山伏」の音読発表会			

III		II		
6	5	4 (本時)		2
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の振り返りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 五年生を招いて音読発表会をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループで音読を聞き合っ て、発表会の練習をする。 ・ 自分たちの発表の見所や 改善点を考え、助言し合 う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表する場面を選んで音 読をする。 ・ 「柿山伏について」を読み 狂言が伝えようとしてい ることを知る。 ・ 声の出し方や身体表現な ど、発表の仕方を工夫す る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「狂言 柿山伏」を読み、 狂言独特の言葉遣いや言 い回しに気付く。 ・ 役割を分担して音読する。 ・ 「伝えられてきたもの」を 読み、五年生向けの案内 を考える。
ウ	イ ア	ウ イ	ウ ウ	ウ
<p>狂言独特の表現や言い回し、古典芸能としての狂言のおもしろさに気付いている。【振り返りに書いた内容や友達が発言を聞いて考えた内容】</p>	<p>練習の成果を發揮し、よりよい表現をしようとしている。【発表の準備、感想】</p> <p>狂言に対する自分の思いや考えを相手に伝わるように音読している。【発表している声や目線、身振りなどの様子】</p>	<p>狂言に対する自分の思いや考えをもち、選んだ場面の様子やおもしろさが伝わるように音読している。【音読の声や助言の内容、身振りなどの動きを合わせて、発表の見所としている点】</p> <p>狂言独特の表現や調子のおもしろさを感じながら音読している。【音読の声や身振りなどの動き】</p>	<p>狂言独特の表現や調子のおもしろさを意識して、音読している。【音読する声の調子や助言する内容】</p> <p>昔の人のものの見方や感じ方に気付いている。【発言の内容や選んだ場面の理由】</p>	<p>話の大きな筋をとらえ、狂言独特の表現に気付いている。【着目した語句やその練習の様子】</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 五年生に伝えるという目的意識で学習を行ってきたことを振り返り、その活動を通して、自分たちは何を学び、どのような力が付いたのか、子どもの言葉を板書に生かし、全体で共有し、教師の評価を伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ場面を選んだグループが補助的に能舞台の周りに待機し、一緒に音読したり、動いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人物像や場面の様子をどのようにとらえ、どのように表そうとしているか聞く。 ・ 「柿山伏について」の文章に立ち返り、「いばっていた山伏が必死になって自分の罪を覆い隠そうとしていること」となど、発表の場面に応じて参考にするよう助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鑑賞を想起し、ゆつくり音読することで調子のおもしろさに気付くことができるようにする。 ・ 「柿山伏について」の四段落目に着目し、「狂言は言っている」の前の文章をまとめられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「えいえい、やつとな」や「さてもさても」などの日常で使わない表現にサイドラインを引くようにする。 ・ 「伝えられてきたもの」を読む際に、どのくらいの年月をかけてどのような作品が伝えられてきたのか板書で明らかにする。

七 本時の指導

(1) ねらい

・ 発表会に向けた「狂言 柿山伏」の音読練習を通して、互いに助言し合ったり、文章に立ち返ったりして、選んだ場面の様子やおもしろさが伝わるように音読することができる。

【本時にかかわる既習の内容】

- ・ 前年度：詩「海雀」や「雪」の音読を通して、近代以降の文語調の作品に親しむ。
- ・ 今年度：漢詩「春暁」や古文「枕草子」の内容の大体を知り、音読や暗唱を行う。
- ・ 本単元：「柿山伏」の内容の大体を知り、狂言の独特の表現や調子の面白さに気付く。
- ・ 前時：音読の役割分担をし、発表する場面を選ぶ。古典を解説した文章を読む。

学習活動と学習内容

時間

指導上の留意点(◇個への支援)

1 前時想起をする。

3

○ 前時、発表する場面を選び、「狂言 柿山伏」や「柿山伏について」を読んで感じたこと、考えたことを工夫として取り入れたことを想起する。

2 本時学習課題を確認する。

5

○ 次時が音読発表会であることを確認し、それぞれの進捗状況を聞き合いながら本時の課題意識を醸成する。

自分たちの音読発表の見所を考え、選んだ場面のおもしろさが伝わるように助言し合おう。

3 課題解決の見通しをもつ。

3

○ 見通しとして、何を(内容)どのように(方法・場)解決するのか、確認する。

- ・ 自分たちの音読の見所(内容)
- ・ ペア二組での助言・必要に応じて全体での話し合い(方法)
- ・ 能舞台の使用(場)

○ 活動の場として、発表する能舞台を想定したひな壇を使用し、発表会へ向かう意識を高める。

4 課題解決のために読む。

8

○ 山伏役と柿主役の二人を一組として音読をする。

- (1) 発表する場面を音読する。
- 文語調の文章の音読
- ・ ペアでの役割読み

○ 「めぐり」の見本を見せ、それぞれの見所を書いたカードをめくりとして、発表会で用いることを伝える。

- (2) 自分たちの音読の工夫を見所としてカードに書く。(自己学習)
- 自分の思いや考えの音声化
- ・ 人物像の明確化
- ・ 狂言に対する自分の思いや考え

1 0

◇ 声に出しておもしろいと感じた言葉をどのように音読しようとしているかを聞く。

- (3) 互いの音読のよい点を見付け、改善点について話し合う。(読み深め合い)
- 文語調の文章の言葉のリズム
- ・ 声の出し方(大きさ、質や速さ、間)
- ・ 身体的な表現

1 0

◇ 「柿山伏について」の文章に立ち返り、「いばつていた山伏が必死になって自分の罪を覆い隠そうとしていること」など、発表の場面に応じて参考にしよう助言する。

- 5 本時学習のまとめをする。
- (1) 本時学習の振り返りをする。
- ・ 学習した内容について
- ・ 学習した方法について
- ・ 自己の変容について
- (2) 次時の学習の見通しをもつ。

1 0

○ 二人組の二組(四人)を「グループ」として、互いの音読を聞き合ったり、助言し合ったりする。

- 声の出し方がよい組を取り上げて、全体よさを認めたり、改善に困っている組の悩みを全体で共有して、改善策を考えたりする。
- 振り返りは、「発表会に向けて自分たちの見所を明確にすることができたか」「友達と見合いながら練習をしたこと」でどのように向上したか「狂言についての自分の考えはどのよう

5

に深まったか」など、学習してきた内容を基に視点をもって書くことができるようにする。

- 次時の音読発表会に期待をもって臨めるようにする。

1

○ 次時の音読発表会に期待をもって臨めるようにする。

次時の学習内容

○ 五年生を招待して、音読発表会を開き、自分の思いや考えが伝わるように「狂言 柿山伏」を音読する。